

オルガギつね

酒井悠人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

息抜きにオルガBBを見ていたら降ってきた一発ネタ。

約束

目次

1

約束

これは、私が小さいときに、村の茂平というお爺さんからきいたお話です。

昔は、私たちの村の近くの、ギャラルホルンというところに大きな要塞があつて、ラスタル様という司令官様が、おられたそうです。

そのギャラルホルンから、少し離れた山の中に、「オルガ」という、大きな前髪を一房携えた狐がいました。

オルガは、子狐たちのリーダーで、シダのいっぱいしげった森の中に穴を掘って住んでいました。

そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

畑へ入って芋を掘り散らかしたり、菜種殻の、干してあるのに火をつけたり、百姓家の裏手につるしてある唐辛子をむしりとったり、「鉄華団」という子狐たちの組織を作ったり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。

二、三日雨が降り続いたその間、オルガは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨が上がると、オルガは、ほつとして穴から這い出ました。

オルガは、村の小川の堤まで出てきました。

川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどっと増していました。

オルガは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。

オルガは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十つひしやうじちだな」

と、オルガは思いました。

兵十はポロポロの黒い着物をまくしあげて、腰のところまで水に浸りながら、魚を捕る、はりきり網を揺すぶっていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番後ろの、袋のようになつ

たところを、水の中から持ち上げました。

その中には、芝の根や、草の葉や、腐った木切れなどが、ごちゃごちゃ入っていました。でもところどころ、白いものがきらきらと光っています。

それは太い火星ウナギや火星キスの腹でした。兵十は、魚籠の中へ、その火星ウナギや火星キスを、ゴミと一緒にぶち込みました。

兵十はそれから、魚籠を持って川から上がり、魚籠を土手に置いて、何かを探しにか、川上の方へ出かけて行きました。

兵十がいなくなると、いたずらがしたくなつたオルガは、草むらから魚籠のほうに飛びだし、魚籠のなかの魚をつかみ出して、川の下手のほうにポンポンと投げ込みました。

どの魚も、ドボンと音を立てて、濁った水の中に潜り込みました。

一番最後に、太い火星ウナギを掴みにかかりましたが、何しろヌルヌルと滑るので、手では掴めません。

オルガはじれつたくなって、頭を魚籠の中に突っ込んで、火星ウナギの頭を口にくわえました。

火星ウナギは、キュツと行って、オルガの首へ巻きつきました。

その途端に兵十が、向こうからやって来て。

「うわあ、盗つ人オルガめ！」

と、どなりたてました。

オルガは、びつくりしてとび上がりました。火星ウナギを振り捨てて逃げようとしたが、火星ウナギは、オルガの首にまき付いたまま離れません。

オルガは、そのまま横つとびに飛び出して一生懸命に、逃げていきました。

洞穴の近くの、ハンノキの下でふりかえってみましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

オルガは、ほっとして、火星ウナギの頭を噛み砕き、やっと外して穴の外の、草の葉の上に乗せておきました。

十日ほどたって、オルガが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかると、その、いちじくの木の下で、弥助の家内が、お歯黒を付けて

いました。

鍛冶屋の新兵衛の家の裏を通ると、新兵衛の家内が、髪をすいていました。オルガは、村に何かあるのか、と思いました。

「なんだよ、秋祭りか。祭りなら、太鼓や笛の音がしそうなもんだが。それに第一、お宮にのぼりがたつはずだが」

こんなことを考えながらやってきますと、いつのまにか、表に赤い井戸がある、兵十の家の前へ来ました。

その小さな、壊れかけた家の中には、大勢の人が集まっています。余所行きの着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えています。

ああ、葬式かと、オルガは思いました。

「兵十の家の、誰が死んだのか」

お昼が過ぎると、オルガは、村の墓地に行つて、六地藏さんの陰に隠れていました。

いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根が光っています。

墓地には、彼岸花が、赤いきれのように咲き続けていました。

と、村の方から、カーン、カーンと鐘が鳴つてきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちらちら見え始め、話し声も近くなり、葬列は墓地へ入っていききました。

人々を通つた後には、希望の花が踏み折られていました。

オルガはのび上がって見ました。

兵十が、白い袴を付けて、位牌をさげています。

いつもは赤いさつまいもみみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「そうか。死んだのは兵十の母親か」

オルガは、そう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、オルガは、穴の中で考えました。

「兵十の母親は、床についていて、火星ウナギを食べたいといったに違いねえ。それで兵十がはりきり綱を持ち出したんだ。ところが、俺が

いたずらをして、うなぎを取って来ちまった。だから兵十は、母親に火星ウナギを食わせることができなかった。そのまま母親は、死んじまったに違いねえ。ああ、火星ウナギが食いてえ、火星ウナギが食いてえと思いつながら、死んだんだろう。ちつ、あんないたずらをしなけりやよかつたぜ」

兵十が、赤い井戸のところ、麦をといでいました。兵十は今まで、おつかあと二人きりで貧しい暮らしをしていたもので、おつかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。

「俺と同じひとりぼっちの兵十か」

こちらの物置の後ろから見ていたオルガは、そう思いました。

オルガは物置のそばをはなれました。するとどこかで、火星イワシを売る声がします。

「火星イワシの安売りだあい。生きのいい、イワシだあい」

オルガは、その、威勢のいい声のする方へ走っていきました。

と、弥助のおかみさんがうら戸口から、「イワシをおくれ」と言いました。

イワシ売りは、イワシの籠を掴んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るイワシを両手で掴んで、弥助の家の中へ持つて入りました。

オルガは、その隙間に、籠の中から、五、六匹のイワシを掴み出して、もと来た方へかけ出しました。

そして、兵十の家の中へイワシを投げこんで、穴へ向かつて駆け戻りました。

途中の坂の上でふり返つてみますと、兵十がまだ、井戸のところ、麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、ウナギの償いでに、まず一つ、いいことをしたと思ひました。

次の日には、オルガは山で火星ヤシをどつさり拾つて、それを抱えて、兵十の家へ行きました。

裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶碗を持つたまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには、兵十のほつぺたに、かすり傷がついています。

どうしたんだと、オルガが思っていますと、兵十が独り言を言いました。

「いったいだれが、火星イワシなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげで俺は、盗人と思われて、イワシ屋のやつに、ひどい目にあわされた」

と、ぶつぶつ言っています。

オルガは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、イワシ屋にぶん殴られて、あんな傷まで付けられちゃったのか。

オルガは、こう思いながら、そつと物置の方へ回って、その入口に火星ヤシを置いて帰りました。

次の日も、その次の日も、オルガは、火星ヤシを拾っては、兵十の家へ持ってきてやりました。

その次の日には、火星ヤシばかりでなく、火星キノコも、二、三本持っていきました。

月のいい晩でした。オルガは、ぶらぶら遊びに出かけました。ラスタル様の要塞の中を通って少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと火星虫が鳴いています。

オルガは、道の片側にかくれて、じつとしていました。話し声はだんだん近くなりました。

それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」

「ああん？」

「おれあ、この頃、とても、ふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつかあが死んでからは、誰だか知らんが、俺に火星ヤシや火星キノコなんかを、毎日、毎日くれるんだよ」

「ふうん。誰が？」

「それが、わからんのだよ。俺の知らんうちに、置いていくんだ」

オルガは、二人の後を尾けていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。嘘だと思ふなら、明日見に来いよ。その火星ヤシを見せてやるよ」

それなり、二人は黙って歩いていきました。

加助がひよいと、後ろを見ました。

オルガはびつくりして、小さくなつて立ち止まりました。

加助は、オルガには気が付かないで、そのままさつきと歩きました。

吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこに入つていきました。

ポンポンポンと木魚の音がしています。

窓の障子に灯りがさして、大きな坊主頭が写つて動いていました。

オルガは、詠唱を開始しているんだなと思ひながら、井戸のそばにしゃがんでいました。

しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って、吉兵衛の家に入つていきました。やがて、お経を読む声が聞こえてきました。

オルガは、詠唱がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助はまた一緒に帰つていきます。

オルガは、二人の話を聞こうと思つて、兵十の影法師を踏みながら尾けていきました。

要塞の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さつきの話は、きつと、そりゃあ、ニュータイプの仕業だぞ」

「えっ?」

兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずつと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、ニュータイプだ。ニュータイプが、お前がたつた一人になったのを哀れに思つて、いろんなものを恵んでくださるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、毎日、ニュータイプにお礼を言うがいいよ」

「うん」

オルガは、へえ、こいつはつまらねえなと思いました。

俺が、火星ヤシや火星キノコを持つていつてやるのに、その俺には

お礼を言わないで、他作品のニュータイプに礼を言うんじゃない、俺は、引き合わねえなあ。

その明くる日もオルガは、火星ヤシを持って、兵十の家へ出かけました。

兵十は物置で縄をなっていました。

それでオルガは、裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。

と、狐が家の中へ入ったではありませんか。

こないだ火星ウナギを盗みやがった、あのオルガイツカメが、またいたずらをしに来たな。

「獣を仕留めるには、ふさわしい作法っちゅうもんがあるそうだ」

兵十は、立ち上がって、納屋にかけてあるダインスレイヴを取って、電力を供給しました。

そして足音を忍ばせて近寄って、今、戸口を出ようとするオルガを、ドンと撃ち、オルガの体に穴が空きました。

そこに兵十が駆け寄ってきました。

家の中を見ると、土間に火星ヤシが固めて置いてあるのが目につきました。

兵十はびっくりしてオルガに目を落としました。

「オルガ、お前だったのか、いつも火星ヤシをくれたのは…」

オルガは、ぐったりと目をつぶったまま、頷きました。

「オ、オルガ…。あつ…。ああ…」

「なんて声出してやがる…。兵十」

そう言つてオルガは、ふつ、と兵十に笑顔を見せました。

「俺は鉄華団団長オルガ・イツカだぞ。これくらえなんてこたあねえ」

「そんな…。俺はなんてことを」

兵十は、ダインスレイヴをばたりと取り落としました。

「俺は止まんねえからよ、お前が止まんねえ限り、俺はその先にいるぞ！ だからよ、止まるんじゃないぞ…」

赤い血が、オルガの指先から細く出ていました。